

omanko theft auto 体験版

PRETTY

UNDYING

BITCH

GIRL

板張りの床は硬く、肩が痛い。両腕は後ろ手に縛られている。何のいわれもなく、床に転がされているのではない。盗みに入ったところを見つかったのだ。

男を捕らえた少女は、興味深げにこちらを見下ろしている。ここが永遠亭であることを考えると、彼女が蓬萊山輝夜なのだろう。彼と比べるとちようど娘くらの歳に見えるが、とんでもない腕力で、あつという間に取り押さえられた。さすがに人外だ。

「次の月都博覧会の用意でもしようかと思つたら、こんな面白イベントに出くわすとはね。この蔵はただの物置だから、貴方が欲しかつたんだらう。金品の類いは置いてないわよ」

それでは、自分は無駄に捕まつたということか。あまりについていない。運気のなさを嘆きながら、男はなお諦められないでいた。どうにもならないものをどうにもならないと認められないのが、彼の悪癖だった。

どうにか許してもらえないだろうか。前科もちになりながら生きていける気がしない。いや、そもそも生きて帰れるだろうか。永遠亭は里の外にある。人間一人が私刑にあつて行方知れずになつても、問題にはならないだろう。

目の前の少女は、直視を躊躇うほど美しい顔立ちに、慈愛をたたえているようだ。己の事情を説明して懇願すれば、見逃してくれるかもしれない。都合の良い望みに彼は賭ける。「あの、見逃してくれませんか」

「泥棒を？」

「事情があつたんです。継いだ家業で失敗して、借金をして、返すにはこれ以外に方法がなかつたんです」

輝夜は黙つて聞いてくれた。もしかすると、いけるかもしれない。罵られたり突っぱねられたりするならもうどうしようもないが、これなら交渉の余地があるかもしれない。輝夜はしばし目を閉じる。開いたときに浮かんでいたのは明らかな失望だった。長々と溜息をつき、彼女は言う。

「しようもない」

「えっ……？」

耳を疑う。しようもない、と言われたのか？

反射的に怒りを覚える。確かに盗みに入ったのは悪いことだ。こっちもこんなことに手を染めたかつたわけではない。葛藤とか、良心の呵責とか、いろいろあつたのだ。それを、こんな立派な屋敷でぬくぬくと暮らすお姫様に切り捨てられるいわれはない。

自分勝手な鬱憤だ。彼の悪いところは、思ったことが全て顔に出ることだ。輝夜は再び溜息をついた。

「同じ開き直るのでも、そういうのはいらなただけだ。自分の悪行を省みることもない

悪人に自分から体を開くっていう感じで遊ぼうと思ってたのに、期待外れ、拍子抜け」

何を言っているのか測りかねたが、輝夜は苛立っているようだった。家に盗人が入ったのだから当たり前に見えるが、どうもそういうわけではないらしい。

「まあ、いいわ。組み敷かれて楽しめないなら、組み敷いて楽しめばいいだけよね。いいでしょう。このまま見逃してあげます。私の暇つぶしに付き合ってくれるならね」

地獄に仏とはこのことだった。一も二もなく頷く。その程度で済むなら、安いものだ。「痛いやつだったりはしませんよね」

「今更そんなこと気にするの？ そんなんでよく人の家に盗みになんて入れるわね。まあ、痛いかどうかは貴方次第ってところかしら」

「うわっ！」

輝夜が近づき、屈んだ。男は素っ頓狂な声を出す。縄を解いてくれるのだと思ったら、突然、下衣を脱がせにかけたのだ。反射的に、身をよじった。

「ちよつと、何するんですか!？」

「何って、暇つぶしに決まってるじゃない」

「いやおかしいでしょう、こんな」

何を思っただけで暇つぶしに服を脱がせるのか、さっぱり分からない。

彼とて、輝夜のような凶抜けた美少女が相手してくれるならもちろん嬉しい。嬉しいが、彼自身、己にそんな価値があると思っていない。いくら何でも出鱈目で、都合が良すぎる。混乱する男と裏腹に、輝夜は、何も変なこととはしていないと言いたげだった。もう一度、衣服に手をかけてくる。転がるようにして逃げる。

二度も邪魔され、彼女はいささか焦れたようだった。足が軽く持ち上がると、男の頭の手すぐそばを踏み抜く。

ひえっ、と、喉から情けない声が漏れた。地団駄のようだったが、床板が砕けている。ほんの少しずれていたら、己の顔面がこうなっていただろう。これが人外の力だ。

「私ね、立場をわきまえない人と、一度で聞いてくれない人って嫌いなよね。そういう人を見てると、うっかり踏んづけちゃいそうになるのよ」

「何も言えなかった。ただ、意図するところは伝わりましたと、必死で頷く。よろしい、という言葉が返ってきた。

「で、ですけどその、……じ、自分には、妻がいます」

「あらそう。それは奥さんが気の毒ね。この私と比べられちゃうなんて」
そういう意味ではないのだが。

男に構うことなく、輝夜は悠々と彼の下半身を剥き出しにさせる。途端、不満げな表情

を浮かべた。

「この私が相手してあげようというのに、勃ててないのは怠慢よ？」

言葉の通り、彼のモノは勃起することなく、ふにやりと柔らかい姿のままだった。彼に言わせれば、あんな脅しをかけられてなお勃起できる方がどうかしている。

「怖がらせすぎたかしら。しょうがない、なら、忘れさせてあげるわ」

何でもいいからとつとと終わらせてほしい。人外だけあつてやることなすこと突拍子もない——げんなりしながらそう思っていた彼だが、次の瞬間には、そんなことを考えていたことすら忘れてしまった。

輝夜が、衣服を脱ぎ捨てたのだ。

尋常でなく美しい顔立ちだと思っていたが、肉体も劣るものではなかった。まさに姫と呼ぶにふさわしい、やんごとなき体だ。あらわになった肌は何もなくとも輝いているかのようで、ミクロの傷一つすらついていないと思われた。

首は病的でない程度にほっそりとしており、肩はなだらかに左右へ伸び、鎖骨と合流し柔らかな曲線を描いている。

ほんのり膨らんだ双丘は彼の掌に収まる程度で、揉みしだくには少々サイズ不足だが、そもそもそんなことを考えること自体恐れ多いと見る者に考えさせるなにかを抱いている。

先端は桜色をして、わずかに尖っている。そんな敏感なところを剥き出しにしてしまつて大丈夫かと、見ているこっちがはらはらしてしまう。

腹部は平坦で、くびれはあまりなく、筋肉の形もほとんどうかがえない。肌がとにかく肌理細かで白いのもあいまって、見ていると吸い込まれて己を見失つてしまふそうだった真ん中に臍の窪みがなかったなら、目線が遭難してしまつていたことだろう。まだ腰骨が広がる前らしく、腹回りのくびれのなさもあいまって、ウエストから下は寸胴に近い輪郭を描いている。悪い意味ではない。むしろ大いに少女らしさを醸し出している。

下の毛は外見年齢からすると濃いようだが、短く丁寧に整えられている。やや土手盛り気味の下腹に陰毛の黒が存在する様は、枯山水に似た風流さがある。秘裂——本来ならば彼女の無理難題を乗り越えた者だけが見られる神聖な場所は、ぴつたりと閉じた蛤の口のような一本の線をすうっと描いていた。見ることに良心の呵責を覚えるというのに、目が吸い寄せられて離れてくれない。

両脚はかなりすらりとしており、少し力を込めると折れてしまふような危うさを覚える。だが決して、不健康という印象は抱かせない。むしろ、姫にはふさわしく感じられた。

総じて少女と大人の境界線上にちょうど足をおいているような絶妙なバランスを保っている。普通ならずぐに過ぎ去つてしまふ一瞬の芸術が、永遠に固定されてそこにある。

かつてはこの体を己のものにしたい、せめて一目でいいから見てみたいと、何千という貴族が集まった。だが結局、帝ですら望みを叶えることはできなかった。そんな肉体を、彼は今目の前にしている。じろじろ見るのは恐れ多いと思いつながら、凝視してしまう。向こうがちよつとその気になれば殺されてしまうということなど、頭から消え去っていた。

「ッ——か、はっ！」

突如として苦しさを覚え、喘いだ。息をしていなかったことに気づく。あまりの美しさに呼吸を忘れるというのは、どうやら誇張ではなかったらしい。

股間が痛い。先ほどまでふらふらと下がるばかりだった彼の一物は、いつの間にか硬く膨れ上がり、天を指していた。

「素直ね。良い子だわ」

娘ほどの見た目の少女にそのようなことを言われるのは、本来ならば屈辱だろう。だが彼の心は、喜びを覚えていた。平凡な人生を送ってきた彼にとつては、輝夜の肉体は一目で虜になってしまうほどの魅力を持っていた。

「だけど、人様の家に盗みに入ろうとしたのはいただけなことよね。罰が必要だわ」

彼女が言うならそうに違いない。そして彼女が言うなら、火あぶりの刑でも車裂きの刑でも進んで受けよう。先ほどまで死にたくないと思っていたというのに、本気で考えた。

輝夜はこちらの頭をまたぐように立つ。何人たりとも犯すべからざる裂け目が、眼前に現れる。それだけで、今まで味わってきた労苦が全て報われるような至福を覚える。彼にとって喜ばしいのは、それだけで終わらなかつたということだ。

彼女はゆっくりと、腰を下ろし始める。視界の中で、何より尊い一本筋が大写しになる。小さくすぼまる背徳の門もだ。彼女はそれでもなお止まらず、とうとう、顔面に座つた。

「んぐうッ」

わりと容赦のない体重のかけ方だ。後頭部が床に押しつけられ苦しい。しかし、そんなことはどうでもいいと思えるほどの悦びが彼を駆け巡つた。恍惚に全身が震える。

「さあ、舐めなさい。それが貴方への罰よ」

罰などとんでもない。何よりのご褒美であつた。彼は犬のように舌を伸ばし、文字通り目と鼻の先にある秘裂を、ぺちやぺちやと舐め啜り始める。

「アッ、くふッ……は」

あわせて、輝夜は小さな声をこぼす。感動に、涙がこぼれそうになった。今のは間違ひなく、快感を表す吐息だつた。彼女のような美少女が、自分の行為で感じている。それは一人から賞賛の言葉を投げかけられるよりも確かな自己承認だつた。

「そうよ、もっと頑張りなさい？ でないと、こうやって、貴方の顔を潰しちゃうから」

ぐりぐりと、腰が押しつけられる。いくら輝夜が華奢だといっても、人一人分の重みがのしかかれば流石に苦しい。苦しいが、彼は心の底からの感謝を覚えていた。なんなら、もつと潰していただきたいくらいだ。

「ムウウツ、むふうツ、んむフウウツ」

「あはっ、ほらほらア」

言葉にならない彼の願いを、輝夜は正確に見抜いているようだった。彼が躍起になって舌を動かすほど、輝夜はぐいぐいと体重をかけてくる。頑張らないと顔を潰す、という先の発言とは矛盾した行動だが、そんなことは問題にならない。

彼にとつてこれは、罰どころか褒美なのだ。一生懸命頑張れば褒美があるのは、当然のことだった。

「あ、ンツ、は、ああ」

頑張れば頑張るほど結果がついてくる。そんなことは、彼の今までの人生で一度としてなかった。素晴らしいことだった。この場合の結果というのは、与えられる被虐であり、そして輝夜の艶めかしい反応だった。吐息混じりの声を聞けば聞くほど、脳味噌が蕩けていくように感じられる。

喜ばしいのはそれだけではなかった。れろれろと舐め回し、唾液まみれにしていた秘裂

から、唾液以外の汁が分泌され始めていた。甘酸っぱくねっとりとした、芳醇なる蜜だ。今まで口にしたどんな酒よりも、彼を酔わせてくれる。

「フーツ、ふうっ、じゆるるっツ、ふう、ウウツ、ううう」

文句などつけようもない幸福に彼は浸っていた。唯一ケチをつけるとするならば、股間があまりに苦しいということだろうか。一物はこれ以上ないほどに硬く膨れ上がり、何かの手段で解き放たなければ破裂してしまいそうだ。

「野良犬にしては、悪くないじゃない。そんなに苦しいなら、楽にしてあげましょう」

「んんううう!!」

奇妙な声が喉からあふれる。股間が、素晴らしくすべすべして滑らかなものに包まれたのだ。うっかり歯を立てたりしなかったのは、彼の人生における最高のプレーだった。

ほとんど肌色がしめる視界の端で、その正体を捉える。彼女は両足を伸ばして、魔羅を優しく包み込んでいたのだ。

男の象徴たるペニスを足蹴にされている。屈辱に震え何をするのだと怒っていい場面だ。しかし彼が覚えるのは、やはり感謝だった。輝夜の魔性の前に、骨抜きにされている。

「ほおら、しこ、しこっ」

「んぐううッ、ぐっ、ふぐううっ!」

彼女はすべやかな両の足裏を合わせて輪を作るようにし、汚らしい肉棒を扱き始める。比喩でなく腰が跳ねる。とても足とは思えなかった。まだ始まって十秒と立っていないが、それでも分かる。妻は手で擦ってくれたし、独身時代に買った商売女は口で啜えてくれた。それらも悪くなかったが、この柔らかくふわふわとした卑猥な感触には比べるべくもない輝夜は、楚々とした外見からは想像もつかないほど、性に通じている。男のことなら隅々まで知り尽くしているようだ。これをあの少女がと考えると、彼はより一層昂ぶる。

「アハハ、いい反応ね、面白いわ。その調子で私を楽しませなさいな」

「うおう、ぐうツ、うぐうツ」

彼はどちらかというが遅漏気味だ。だというのに、気を緩めたら、あつという間に射精してしまいそうだった。それでもどうにか堪えているのは、少しでも長く彼女からの褒美を享受していたいからだ。

「ちよつと、お口がお留守になつてるわよ？」

「ぐうツ！」

親指と人差し指で、竿をつねりあげられる。痛い、彼女にされるならばそれも快感に感じられる。もつとしてほしいかったが、そのために口奉仕を疎かにするのは大馬鹿者のすることだろう。必死になって舌を動かし、秘貝をぺちゃぺちゃと舐めしゃぶる。

「ふっ、ん、あは、そうよ、そうそう、それでいいの」

そうして舐めれば舐めるほど、輝夜の汁を味わうことになる。どんな精力剤よりよほど効く、蓬萊人の愛の蜜だ。味わえば味わうほど理性が破壊され、本能力を得る。寧丸が、ぐつぐつと煮えているように感じられた。子孫繁栄のための汁を、すさまじい勢いで製造しているに違いなかった。

「あはっ、んっ、ああ、楽しいわね。いいわ、貴方みたいな犬ところ、嫌いじゃないわ」
艶やかな声をこぼしながら、彼女は両足裏で肉棒を挟むようにし、交互に擦りあげる。時折アクセントをつけるように、竿をつねってくる。下半身が蕩けるような感覚だった。そのうちに、にちゃっ、にちゃっ、と粘っこい音が響き始める。先走り尿道口からあふれ、彼女がそれを竿全体に塗り広げているのだ。その音は、自分は今愛撫を受けているのだという意識を高めていく。

「う、おおっ、おお、おおおっ、ふぐううっ、じゆるる、ウううっ」

今まで彼は、散々竿を撈られ、それを喜んで受け入れていた。だがここにきて、初めて緩めて欲しいと感じていた。

彼女の行為に飽きたり、嫌になったわけではない。そんな恐れ多いことは考えていない。むしろもっと長く、何なら己が天寿を全うするまで続けていたいと思っているからこそ、

緩めて欲しかったのだ。

「ほおらあ、射精でそうなんでしょ？ 射精だしちゃえばいいのに」

それが理由だ。己の内からふつふつと衝動が湧き上がってくるのを感じていた。彼女の言うとおり、射精が近いのだ。

間違ひなく気持ちいいだろう。天にも昇る心地に違ひない。それでも、まだ達するわけにはいかなかつた。こんな機会は、推測するまでもなく二度と訪れない。楽しい時間になるべく続いてほしいと考えるのは、人として当然の情動だろう。

彼のささやかな贅沢を、輝夜は認めないつもりであるらしかつた。唾液と愛液で濡れる秘部をぐりぐりと押しつけ、さらには両脚の動きをさらに激しくする。カウパーが潤滑液の代わりとなり、柔らかな足裏の感触にぬるぬるとしたものが加わる。ただでさえ限界が近かつた彼が、堪えられるはずもない。

「んッ、ぐッ、ううッ、うぐうウッ——！」

「あはッ」

なす術もなかつた。決壊させまいとしていたものが、あつさりと決壊する。情けない声をあげる彼の腰が、ブリッジでもするように浮く。

睾丸に、強烈な快感が走つた。許容量を超える刺激を受けた陰茎が、溜め込んだ欲望を

解き放とうとしているのだ。白濁は輸精管を通り、尿道と合流し、そして解き放たれる。びゆるびゆると放たれたそれは、空中へ打ち出され、物理法則に従って落下していく。輝夜の足や床に着弾し、無数の精子で汚していく。

強烈だろうと思っはいたが、想像以上だった。妻との性交ですら、これほど勢いよくぶちまけたことはなかった。勢いが良い分、得る快感もすさまじい。どくどくと、精液と一緒に生命まで放っているようだった。気持ちよさのあまり思考が一瞬飛ぶ。

「ツぐ、ふうつ、ふうつ、うう、ふう」

「あはは、果てちゃったわねえ、みつともなく」

絶頂は十秒も続かない程度の短い現象だが、彼には一時間ほどにも感じられた。終わるころには、体中汗が噴き出していた。くすくすと、気品がありながら人を露骨に見下した笑い声が聞こえる。

「苦しそうね、退いてあげましょう」

ほんの十分も前なら、是非そうしてくれと言っていたことだろう。すっかり輝夜の虜となった彼は、むしろ退かないでほしいと感じていた。このままずっと自分の顔を椅子にしてくれて構わないし、クンニリングスを続けさせてほしいと思っていた。それだけに、彼女の秘部が離れていくのを目の当たりにするのは、泣きたいほど辛いことだった。

「捨てられた犬みたいな顔ね」

彼女はこちらを見下ろしていた。よほど愉快なのだろう、そういう表情を浮かべている。唾液と愛液のしたたる秘部を見ると、どうしようもなく惜しい気持ちになる反面、自分があんな素晴らしいところをあのようにしたのだという誇らしさのようなものが湧いてくる。誰にも理解されずとも、彼のプライドとして心に残り続けるだろう。

「乗っかかれて興奮して、惨めたらしく射精して。いい見世物だったわよ。そこそこ楽しめたわ、そこの馬の骨にしては」

ほとんど中傷であるが、彼はそれを純粋な褒め言葉として受け取っていた。輝夜からの言葉であれば、なんであれ耳を喜ばせる最高の音楽に思える。

「はい」

眼前に、彼女の足が差し出される。大地を踏みしめ歩むための部位と思えぬほど繊細で、驚くほど白い。女であれば誰であれ、嫉妬を覚えずにはいられまい。

本来なら汚れ一つ存在しないのだろうそこは、今は彼の子種がべつとりまとわりついている。ここで、肉棒を抜いてもらった、彼女自らそうしてくれたのだという事実には、妻を初めて抱いたとき以上の喜びを見いだす。

見せられるのはとても嬉しいことだった。愛液にまみれてらてら輝く顔で、彼は惚けた

ようにそれを見つめている。

「あら、なにをぼうつとしてしているの？ 汚したら掃除するのは当然だと思わないのかしら。察せない子は嫌いよ？」

お前の子種で汚れたのだから、掃除するのもお前の仕事だと、彼女は言いたいのだろう。もちろんこんなところに、手拭いの類いなどあろうはずもない。お前の口で清めろ、お前自身の子種を、お前自身で舐めしゃぶれと、彼女は言っているのだ。

屈辱的な発言だった。相手を見下しきっていないと、そんな発想は出てくるまい。実行に移せば、男の沽券に関わる。だが彼は、輝夜に感謝する。当たり前だ。足を舐めさせていただける。己のしでかしたことの後始末をつけさせてもらえる。どうして怒ったりするだろう？

「ん、ぢゆるっ、ふう、ふう」

考えてから行動に移すまで、五秒とかからなかった。骨ガラを差し出された犬のように、彼はそれにしゃぶつき、足指の爪の隙間に至るまで丁寧に舐め清め始める。母の胸に吸い付く赤子のような様だった。

「あら、もう少し葛藤するものと思ってたけど」

いささか拍子抜けしたような声が降ってきた。自分は何か間違ったことをしただろうか、

不安に心が押しつぶされそうになる。

「ふふ、これはこれでいいわね。そうそう、そうやって上手にできる限りは、私の暇潰しに使ってあげるから、頑張りなさいな」

そう言われては、頑張らずにいられない。じゆるじゆると音を立てながら、足趾の一本一本にいたるまで丁寧にしやぶっていく。己の白濁も、輝夜に付着していたものと思うと、上等な蜂蜜のように感じられた。

「同じことを、帝にもやれって言ったことがあるんだけど、流石に拒否されたわ。素直さでは貴方のほうが上ね。良かったわね、他人に誇れるわよ、当時の時の人に勝つなんて」
憤慨する。誰に勝ったとか負けたとか、そういうことはいまいちどうでもよかったが、輝夜からの命令を拒否する者がいるというのは信じられないことだった。帝だかなんだか知らないが、傲慢に過ぎる。

「はい、もういいわ。……もういいって言ってるでしょう？」

できればいつまでも味わわせてほしかったのだが、彼女は許さなかった。足が引かれる。名残惜しさに涙がこぼれそうになる。

「うん、犬にしては上出来ね、すっかり綺麗になったわ、どろどろだけど」

足の甲を頬に押しつけ、軽くビンタされる。自ら頬ずりするようになって応じる。暖かく、

驚くほど滑らかだった。以前、一度だけ上等な絹布に触れたことがあるが、あれがぼろ布に思えてくるほどだ。精液まみれだった足趾は、今は唾液にまみれ、てらてら輝いている。

「ウウツ」

「まだ勃つてるの？ あんなに射精したのに？ 節操ないわねえ」

彼女の指摘したとおり、金玉の中身全てを吐き出すような射精の後だというのに、彼のモノは萎えるどころか一層硬く膨らんでいた。輝夜のような少女が相手してくれる機会を無駄にしてなるものかと、睾丸はフル稼働で精子を作っている。

あまりに充血しており、痛い。輝夜は再び、足でそれを撫でる。嘲るような口調ながら、足遣いはむしろいたわるようだった。先ほど射精したばかりのモノには、それすら過ぎた刺激で、彼は腰を震わせた。

「絶倫というか、欲深というか……どっちにしろ、そのままじゃ辛いでしょう？ 鎮めてあげるわ、今のよりももっと楽しくて、気持ちいい方法で、ふふ」

「ああ……ツ」

今のよりももっと楽しくて気持ちいい方法。思い当たるのは一つしかない。輝夜が彼の腰のあたりに、再び跨がったことで、推測は確信に変わる。

性交しようと彼女は言っているのだ。女の腔にペニスを入れ、ともに動き射精するまで

の一連の動作を。

生きててよかったア！

涙が出そうだった。借金ができたときは相当辛かったが、それも全てこのときのための伏線だったのだと考えると、不運にも感謝できる。妻を娶り初夜を迎えたとき以上の喜びに、彼はうち震えた。

「ほおら、どうかしら……」

「おおつ、おおお、おお」

輝夜は己の秘穴の存在を知らしめるように、肉棒に腰を擦りつける。秘唇が竿と擦れ、くちつ、くちつと音を立てる。いわゆる素股だ。前後するだけの単純な動作だが、睾丸が全力で稼働し、吐き出すべき精を作り上げていくのを感じる。

「どうかしら？ ココが気になる？ 挿入したいの？ 挿入れさせてあげましょうか？」

輝夜は軽く腰を浮かせる。己の下腹に指をかけ、秘唇を自ら割り開く。秘められるべき穴の中を、彼に自ら見せつける。

輝夜がいろいろな男と「遊んでいる」のは明らかなことだ。そういうことを匂わせる発言はあったし、そうでなければこれほどの性技を身につけられるはずがない。膣穴も、相当使い込まれているはずだ。女性器というのは簡単に色素沈着を起こし、黒ずんでしまう。

使つていればなおさらだ。

だというのに、そこは驚くほど無垢だった。秘唇は鮮やかなピンク、艶めかしい肉の色を保ち続け、膣内は処女のような——否、ようだ、ではない。彼は確かに見た。男のおの字も知らないような純真なる秘穴の奥に、純潔の証が存在するのを。

「ねえ、破りたい？」

体をびつたりと触れさせるようにもたれかかって、彼女は問いかける。上衣を着たままなのがかもどかしくて仕方なかった。肌で直接、彼女のぬくもりを感じたい。

しかし、そんなことはどうでもいい。それくらい、今の質問は衝撃的だった。首を縦に振りまくる。張り子の虎にも負けない勢いだ。彼女は慈愛をたたえた微笑みを浮かべる。次の瞬間、それは凶悪なものに変わった。

「そう？ でもダメ、破らせてなんてあげない」

彼の表情が、落胆を通り越して絶望を示す。そもそも夢のような話ではあった。だが、実現するかもしれないと思つたところを取り上げられるのは、辛いものがある。宝くじが当たつたと思いきや、期限切れのものだったような感覚だ。

「そんな顔したって、駄目なものは駄目よ？ 他のことならいいけどね。この私の純潔を、貴方ごときが奪えるわけがないでしょう？ どうせ後で回復するつていつたってね」

百パーセントの正論だ。自分にそのような価値は全くもってない。それでも、悲しみを覚えずにいられない。

「なにより、体が辛くてたまらない。セックスできるとすっかり思い込んでいた寧丸は、緊急生産した精子をたっぷりと内側に溜め込んでいる。吐き出さねば、ペニスが発射してしまいそうだった。」

「お、お願いです、射精させてください、ううう」

「早とちりが貴方の悪いクセなのかしら。私は別に、一切何もしないとは言っていないわ。まぐわってあげるわよ？ ただし……ここでね、アハッ！」

男に寄り添っていた輝夜は、再び体を起こす。彼の肉棒を、白い指で摘まみ、導く。己の入口——いや、出口に。

とろとろとあふれる愛液が伝い、濡れそぼっていた薄灰色の窄まり、肛門。彼女は男の肉棒を、自らの排泄器官で啜え込もうとしていた。

「感謝しなさい？ 貴方ごとき地上の虫けら、こちらでも勿体ないくらいよ」

「嗚呼……」

無茶苦茶極まる、人を見下しきった発言だ。いい加減怒っていい。それでも彼は、怒らないどころか、本当に輝夜に心からの感謝を捧げていた。両手の自由がぎいたなら、神様

仏様蓬萊山輝夜様と、拝み倒していたところだ。

「アハ……見えるかしら、私の尻穴に、貴方の汚らしいモノが、挿入^はっていくところが」
「お、おお、おおお、ううおお」

見えていないはずがない。目を血走らせ、一瞬たりとも見逃すまいとしているのだから。網膜にこの光景を文字通りに焼き付けられたら、どれほどいいだろう。瞬きすることすらもどかしく思えた。

同時に彼は、聞き苦しい声を盛んにあげていた。先ほど射精したばかりで、内に溜めた欲望で自爆しそうになっている肉棒には、彼女の腸内はあまりに刺激が強すぎる。

何よりも柔らかくふんわりと温かく包み込む一方で、きゆうきゆうと締め付けて、淫らに絡みついてくる。これが排泄器官だとはとても思えない。

まだ亀頭が挿入^はった程度だが、早くも彼は、輝夜のアヌスの虜になっていた。膣で性交できなかつた名残惜しさなど、すっかり消え失せていた。現金だと彼を責めるものには、想像力が欠如している。これを前に他の快楽を思い出すのは、贅沢以外の何物でもない。

「あはッ、挿入^はってくる、下衆のものが、私の中に、ああ……」

一方の輝夜も、彼のモノに悦楽を見いだしているようだった。蕩けた声を出しながら、夢中になった表情で、ゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと、腰を下ろしていく。ず、ぬぬ、と、菊穴が

肉棒によつて押し広げられ、二人はより深く繋がっていく。

「あはあッ——」

「おおウッ……」

やがて、二人して恍惚の溜息をこぼす。彼の腹が、丸く美しい輝夜の尻と密着していた。菊穴は肉棒を根元まで深々と啜え込んでいた。

肉棒で感じる輝夜の体温に、下半身が蕩けそうだという感想を抱く。下半身がどろどろに蕩けて、輝夜と混ざり合っているようだ。己を保つ努力を続けないと、今この瞬間にも射精してしまいそうだった。それもいいかもしれない、と思えてしまう。

「ふふ、どうかしら？ 貴方みたいなクスにはこつちがお似合いだと思つただけけど、悪くないでしょう？」

悪くないどころか、最高だった。文句など付けようものなら天罰が下る。

尻穴でモノを啜え込んだまま、輝夜は大きく両脚を開いてみせる。秘貝が露わになる。今も性の悦びにとろとろと蜜をあふれさせる貝が。

「こつちと、どつちがいいかしら？」

そう言つて、彼女はまた秘唇を指で割り開く。再び、純潔の証が彼の視線に晒される。本来、彼ごときが目にする事かなわぬ宝が。返答に詰まる。それはいわゆる究極の問い

というものだった。

「そう、答えられない？　なら、答えられるように、してあげましょうか」

「お、おとおおッ!？」

びたんびたんと、腰が跳ねる。打ち上げられた魚のようだ。

輝夜が腰を上下させ始めたのだ。ぬぶ、ぐぶと粘つく音を立て、尻穴は肉棒をしゃぶり始める。腸壁は動きに合わせて、意思を持つているかのようにペニスに絡みついては、彼を快楽によがらせる。

「おうッ、お、うおおッ、おうううッ」

セイウチじみた、聞き苦しい声があがる。あまりの幸福に、気が狂いそうだった。輝夜の菊穴は、まさに名器と呼ばれるにふさわしい。挿入れれば最後、他の手段で二度と射精できなくなるような魔性を備えている。しよせん一般人であるところの彼が、真っ向から対峙できるようなものではなかった。

「あぁっ、はぁ、ンッ、アハッ、あぁっ」

そこに追い打ちをかけるのが、視覚、そして聴覚から入り込む情報だ。頬を紅潮させて自ら腰をくねらせる輝夜の姿は、淫らという概念を形にしたかのようにだ。見ているだけで、達してしまいそうになる。さらに、彼女の口からこぼれ落ちる嬌声。妻の声をいたく気に

入っていたはずだが、これを聞いた後ではガマガエルの鳴き声のように思えてくる。

「はあ——ほら、どうしたの？　いつまでもじつとしてないで、自分から動きなさいな」
喉が鳴る。そんなことをすれば、快樂のあまり死んでしまいうさだ。しかし、他ならぬ彼女が言うことなのだ。断ることは絶対にできない。

「お、うおおッ、おおおおッ、おお！」

「アハッ！　そうよ、もつと、腰振りなさい、猿みたいに、ああんっ！」

人外たる輝夜には通じなかったが、それでも筋力には自信があつた。がむしゃらに腰を突き上げれば、華奢な彼女の体は当然、担ぎ上げられた神輿のように上下する。

技術も何もあつたものではない、欲に突き動かされるままの抽送だが、輝夜は明らかに感じていた様子を見せた。それが彼に感動を覚えさせ、行為に邁進させる。彼女の言葉の通り、猿のように腰を振りたくる。

「うッ、うお、お、ぐおッ、おおおっ！」

もつと彼女の感じているところを見たい。そんなシンプルな欲望に突き動かされ始めた行為だったが、諸刃の剣だつたことを今になって理解する。肉棒で彼女を突くのは、腸壁に竿が擦られることとイコールだ。

拍車をかけるのが、彼女の動きだつた。暴れ馬を御するように、彼の無茶苦茶な抽送に

合わせて腰をうねらせている。ただでさえ過ぎた快樂が、さらに強烈なものになる。

正直、いつ射精してもおかしくなかった。それでも堪えられていたのは、少しでも彼女と長く繋がっていたいという意地だった。それすらも、彼女は文字通りに踏み潰す。

「ンあッ、ねえ、私も果てそうだから、早く射精しなさいよ、私の尻穴に、汚い白いの、いっぱい、ほらあッ！」

「ムぐうッ——」

繋がったままで彼女の両脚が閉じ、すつと前に伸ばされる。自然、足裏が、彼の顔面のあたりにくる。輝夜はそのまま、彼の顔に己の足裏を押しつけた。

踏んでもらえた。

「う、ムグ、う、おおおおおおおッ——！」

「あつはあッ——！」

それが呼びび水となった。まずいと思う暇すらなかった。ぎりぎりのところで耐える堤防は、一度呼びびが入ればあつという間だ。凝縮された欲望が鉄砲水のように尿道をのぼり、思い切り解き放たれた。

びゅぐ、どぶつと、尿道口から白濁した男汁が放たれていく。二発目だが、そんなことは全く関係がないと言わんばかりに濃いそれは、彼女の尻穴を汚していく。

同時に彼女も達したようだった。背を逸らして、悦びの声をあげる。踏まれている彼は、その姿を見られない。見られないが、勿体ないと感じている余裕はなかった。尻穴射精の快楽は、脳の回路を焼きそうなほど強烈なものだったのだから。

「うおおつ、ぐウツ、うううううう！」

「アハアツ、いいつ、クズのチンポが私のナカ掻き回してツ、アハアツ、アア！」

しかも輝夜は、己も果てているというのに、腰のグラインドを止めない。精液の一滴も残さないと言わんばかりの、獣のような動きだった。秘裂から愛液がとめどなくあふれて床を汚し、全身から汗が噴き出している。

精ばかりか、命を搾り取られているようだった。本当にそうだったとして、何も問題はないと思えた。これほどの快感の前には、どのような代償すらも真つ当なものと思えた。

「ぐうツ——う、おおウ、おおツ……」

絶頂は永遠に続くほどに思えた。少なくとも、たつぷり数十秒は続いたようだった。男の射精としては、異様なほど長い。この肛門性交が彼に与えた快感をなにより示していた。彼の胸板が激しく上下する。呼吸が荒い。体力全てを消耗した。とにかく酸素が必要だ。「ふう……悪くなかったわよ。少なくとも、下賤な民にしてはね」

体液という体液を解き放ったような彼に対し、輝夜はまだ余裕を残しているようだった。

額に浮かぶ汗を拭うと、ゆっくりと立ち上がり、モノを菊座から解放する。ぬぼおつ、と、締めりの良い尻穴は空気が混じりの粘つく音を立てた。

「腹の中が温かいわね。貴方の精液を感じるわ、下衆の精を。ふふ、私、汚されたのね」
倒錯的で、満足げな笑みが浮かぶ。彼女は彼の下にかがみ込むと、両腕を縛っていた縄をようやく解いた。

「お疲れ様。帰っていいわよ」

のっそりと起き上がる。呼吸はいくらか整った。このまま帰るもよし、あるいは散々なことをしてくれた輝夜に対し、復讐するもよしといった状況だ。

だが、彼はどちらの行動もとらなかつた。自ら彼女の足に縋り付き、その指を舐める。

「あらあら。そんなに私にいたづられるのが気に入った？」

勿論だ。彼女に好き放題にされれば、またあの脳味噌がイカれるような快楽に焼かれることができる。妻や人里での生活を全て捨てても、得たいものだった。

「あはは、ほんつとうに、どうしようもないわね。気に入ったわ、雄因幡達と一緒くたに飼ってあげてもいいわ。だけど、そうね、忠誠を示してもらいましょう。口づけなさい、ここに」

言って輝夜は、四つん這いになった。己の尻を突き出し、左右に割り開く。剥き出しに

なるのは、先ほどまで男のモノを深々と啞え込んでいた、背徳の穴だ。絶頂の余韻にか、ヒクヒクと蠢いている。とろりとあふれるのは、精液と腸液がない交ぜになった汁だ。

お前が立った今射精したばかりの尻穴に接吻せよ。彼女はそう言っている。傲慢どころで済まない要求だが、彼の行動は、勿論一つだった。

「ん、そうよ、舌を入れて、褻まで穿りなさい、お前が汚したところなのだから、責任をもって、吐き出した汚い子種を全部、吸りなさいなッ……」

じゅるじゅると音を立てて、肛門をしゃぶる。舌を差し込み、ぬるつく腸内をたっぷりと味わう。

これでここにおいてもらえる。このようなことを、毎日してもらえるしさせてもらえる。こちらを嘲る輝夜の笑い声が、彼には福音のように聞こえていた。